

## サン・テグジュペリ (2)

— 神・信仰について —

### 大 賀 淳

先には、サン・テグジュペリの「全体と個についての考察」に関して、考えてみたのであるが、このことはサン・テグジュペリの「神」および「宗教」についての考え方、或いは捉え方と密接にかかわっている問題であるので、ここでサン・テグジュペリが「神」および「宗教」についてどのように考えていたかまた彼の信仰について考えてみたいのである。

一般に言はれているように、少年時代はカトリック——ジュジュイット系——の学校で、また家庭でも厳格なキリスト教に基く教育を受け、青年時代にはキリスト教から遠ざかり、以後キリスト教信仰を離れ、サン・テグジュペリ自身が言うように「人間の宗教」を打ち立てようと考えていたと受け取られている。

この間の経緯については、たとえ推測によるとはいえ André Devaux<sup>(1)</sup>の著作に詳しく述べられているが、サン・テグジュペリ自身、それを明確に証言する文章は残していない。したがって、彼の著作や、彼自身を知る人々の証言などによって評者が推論するだけの域を出ていない。

しかし、このことは私にはさして問題ではないように思はれる。

というのは、既成の宗団に属するとか、その宗団の儀式典礼を重んじ、それを行ずるとかということが、その人の宗教性あるいは信仰心といったものを、本質的に決定するとは思われぬからである。

## 2 サン・テグジュペリ (2)

宗教を、その教義と儀式典礼の面からみれば、世界には無数にその宗門が存在するであろう。

宗団と宗団が、自身の教義、教勢の拡張を図る上で、互に争い、戦った事例は歴史上いくらでもみられ、相互に相反し、相容れないかのような外観を呈してきたことは事実であり、その儀式典礼の相異に至っては、種々様々にその姿を異にしている。

各々、築きあげた文明および、その文明圏の相異もまた明白な事実である。

本質的なもののうえに付加された文明的なものの総体としての宗教を論じる面からみると、サン・テグジュペリが、キリスト教から離れたとみられることによって、彼の宗教性、信仰心を云々することは容易な問題であろう。しかし、それでは、彼の心の奥底に、本質的に横たわる宗教性、信仰心を捉えることにはならないし、サン・テグジュペリ自身を理解することにはならないように思われる。

私は、サン・テグジュペリの著作を読む毎に、彼の深い宗教性と信仰心と、それによって培ちかわれた教養や真心が、ひしひしと感じられるように思われる。

殊に、サン・テグジュペリの思想的に完結した最後の作品となった「戦う操縦士」に、彼の深い宗教性と信仰心が明確に語られているので、これを読むと、サン・テグジュペリが、宗教を、神を、そうして人間を、如何に考えていたかが明確になると思われる。

第二次世界大戦のさ中、今まさにフランスとその文明は亡びようとしている。

その文明についての思索の中で、サン・テグジュペリは宗教の方へとその思索を向けていくのである。

『敗北は、勿論、個人の破産として現われる。ただ、個人を形成るの

はそれぞれの文明だ。だから若し今、僕が自分の属する文明として受取るものが個人の過失の故に亡びようとしているというなら、その文明は何故もっと別種な個人を形成っておかなかったのかとの疑問を持つことは許されるわけだ。

或る一つの文明は、或る一つの宗教と同様に、信者の懈怠を訴えるようになったら、それはとりもなおさず自分自らを非難しているのである。それが、不信の徒の憎悪を訴える場合も同一である。宗教には、彼等不信の徒を教化する義務が自分に対してある筈なのだ。ところが、昔は、使徒を熱狂させたり、強敵を挫いたり、奴隷の民を救ったり、大いに為すあるを示した僕の宗教が、今日では、人心を昂揚させる事も出来なければ、異端者を改宗させることも出来なかったのだ。

僕が自分の敗北の諸原因の根元を払い退けようと思う以上、僕に更生の野心がある以上、僕が先ず失われた酵母を取戻そうとするのは当然だ。……

僕が或る種の間人とその能力とを救いたいと思ったら、またその間人を形成する原理を救わなければならない。

ところが、僕は、自分がわがものとして受取る文明の姿は見失わずに来てはいるが、それを变化させて来た法則は見失ってしまった。……僕は、間人が、友愛に結ばれて、自由であり、幸福であらん事を願ったのだ。……僕は、間人は「如何に」あるべきかは説き得たが、間人が「何者で」あるべきかは説き得なかつた。<sup>(2)</sup>』

以上の言葉の中に、サン・テグジュペリが生涯を通じて、その思索と作品との中で、思いを凝らして見極め批判しまた求めつづけたものの要約が語られており、彼の人間および世界を観る観点が明確に語られていると思われる。

そうして今、アラス上空で受ける敵陣地からの砲火の中で、「人間が何者であるべきか」「人間は何者なのか」の解答が、啓示とでもいうか、

また示現とでもいうべき形で、突然、サン・テグジュペリに現れるのである。

彼は言う。

Je n'étais que gérant grincheux. C'est ça, l'individu. Mais l'Homme est apparu. Il s'est installé à ma place, tout simplement.<sup>(3)</sup>

かくして、サン・テグジュペリの「Conversion」(廻心、悔い改め、観の転回)が行われるのである。彼は、もう、一個の肉体としての人間ではなく、神と繋がった神人即ち「l'Homme」になったわけである。

多くの優れた宗教者にみられる廻心が、あのアラス上空の砲火の中で突然に、サン・エグジュペリを見舞ったのである。

永遠に実在なる者への回帰と同時に、「l'Homme」(真人間)即ち、永遠に存在する普遍共通にして、しかも個性ある、実在者の分身が現前したのである。

続けて、サン・テグジュペリは次のように言っている。

Il (l'Homme) a regardé la foule en vrac, et il a vu un peuple. Son peuple. L'Homme, commune mesure de ce peuple et de moi.... L'Homme regardait par mes yeux — l'Homme, commune mesure des camarades.

Est-ce un signe? Je suis si près de croire aux signes.... Tout est, ce soir, entente tacite. Tout bruit m'atteint comme un message, limpide à la fois, et obscur....

Encore une fois j'ai éprouvé le sentiment d'une parenté miraculeuse. L'Homme qui m'habite ce soir n'en finit pas de dénombrer les siens. L'Homme, commune mesure des peuples et des races.<sup>(4)</sup>

「僕の内部に住む〈l'Homme (真人間)〉」とサン・テグジュペリが言う真に自分なる者は、全ての人々の中にも住み得る〈l'Homme〉でもある。

かくて、サン・テグジュペリが凡ゆる人の共通の尺度と呼ぶ〈l'Homme〉は、彼が、

Dans ma civilisation, celui qui diffère de moi, loin de me léser, m'enrichit. Notre unité, au-dessus de nous, se fonde en l'Homme.<sup>(5)</sup>

と言うように、神において、共通的、普遍的で、永遠の真実なる「存在」である。

そうして、それと共にまた、サン・テグジュペリが、

En l'Homme se retrouvent, de même, les Français de France et les Norvégiens de Norvège. L'Homme les noue dans son unité, en même temps qu'il exalte sans se contredire leurs coutumes particulières. L'arbre aussi s'exprime par des branches qui ne ressemblent pas aux racines. Si donc, là-bas, on écrit des contes sur la neige, si l'on cultive des tulipes en Hollande, si l'on improvise des flamencos en Espagne, nous en sommes tous enrichis en l'Homme.<sup>(6)</sup>

と言うように、各々個性を持った特殊な個として、この現実の世界に表現身を現わすのである。また言い方を変えると、特殊な個を通して、真実なる〈l'Homme〉が、自らを表現すると言える。

普遍にして個、個にして普遍という存在観がここにはみられる。仏教的な存在観とでも言えるであろうか。

サン・テグジュペリが情熱をこめて求める友愛、共同体の一員としての喜びは、単なる事象を目前にしたり、単なる目標をみつめて生じる共歓ではなくて、人間各自の奥に住んでいる、この〈l'Homme〉が、彼

が単一性と呼ぶ此の共通の尺度が、各自に現れて、一体となって合一の喜びというものであり、普遍的生命に融合して湧出する、生命の歓喜であらう。

この生命の歓喜に満たされたとき、先に引用した、サン・テグジュペリの言葉の中に「今夜僕の内部に住む〈l'Homme〉は、次ぎ次ぎに自分の仲間を枚挙しつづけてどどまらない。」とあるように、凡ゆる人々が互に挨拶し、話しかけ、お互の宝物を交換し合って、互に精神の交歓が木魂し合い、互いを豊かにし、単一性と個性との融和の中で、即ち一体感の中で生きる喜びを感じ合うのである。

サン・テグジュペリは、この生命の歓喜を感じさせる人生を求めつづけて、或る時は静かな愛を感じて人々を友愛のうちに包み込み、或る時は情熱にあふれる行動に自らをかき立て、或る時は人間に失望し、悲しみの中で、人間とその文明とを批判し、更に或る時は、人間のあるべき姿、文明のあるべき姿を求めて思索しつづけたのであった。

時は、まさに世界的な人類の苦難の時であり、そのことが、サン・テグジュペリに一層、「人間とは何か」、「人間の共同体とは何か」について、緊急に探求すべき問題として、彼を鞭打ちつづけたと思はれる。

この〈Pilote de Guerre〉(戦う操縦士) が出版されたのは1942年であるが、この頃すでに、思索しつづけた結果と、直観とによって、サン・テグジュペリの人間観は、ほぼ固っていたと思われる。

ちょうど、それは、〈Citadelle〉(城砦) が書き始められたのが、いろいろな人の考証で1936年ないし1938年頃と言われており、〈Pilote de Guerre〉と照応する思想に基いて書かれていると思われるこの〈Citadelle〉の成立からみると、〈Pilote de Guerre〉は、〈Citadelle〉の頂点に位いする思想が述べられていると考えられる。

〈l'Homme〉という真人間を鍵として〈Citadelle〉を読むと、極めて明解にサン・テグジュペリの思想が明らかになると思われる。

それでは〈l'Homme〉とは一体、何んであるのか。

もし、サン・テグジュペリが、1944年、その飛行機と共に、その姿を没してしまわなければ、〈Citadelle〉その他で、もっと明確に定義されて、一つの偉大な思想を築きあげたろうと思われるし、また或るいは、人間の欲によって手垢のつけられ、その生命を失いつつある既成の宗教に、鮮烈な浄化の灯をともし一大宗旨を築きあげたかとも思われる。

しかし、サン・テグジュペリは、その犠牲の観念のゆえに、フランスとフランス人を救おうと、また世界と人類を救おうという、大いなる希望に燃えて、自分自らをその犠牲に捧げて、空中に散華したのであった。

それで今、〈Pilote de Guerre〉の中の僅か十数頁の中にちりばめられた、〈l'Homme〉について考えてみたいのである。

サン・テグジュペリは〈Pilote de Guerre〉の中で、次のように言っている。

Et voici qu'il me semble parvenir au terme d'un long pèlerinage. Je ne découvre rien, mais, comme au sortir du sommeil, je revois simplement ce que je ne regardais plus.<sup>(7)</sup>

このことは、前に述べたように、サン・テグジュペリの長い間の思索が、その頂点で思想の花を開き、彼の思想がほぼ固ったことを表わしているのである。そうして、様々な人間的知性や教養、また文明の外形的なものによって養われ、昏らまされた意識が、〈l'Homme〉即ち、本質的な真の人間なるものによって、何度も、覚醒されては、人間の本質と、文明の本質とを掻い間見つけたことを言っているわけである。

それは、人間の単なる努力によってのみでは、創り出されるものではなく、既に存在しているものを、直観によってか、或いは啓示によってか、或る時、突然に気付かれるものであることを語っていると思われ

る。

既に、永遠に実在しているものに、ふと気付くこと、それが人間の本質に触れることであり、それが生命の歓喜に燃えあがることであると言うのであろう。

人間にとって、先験的に存在しながら、この世界にあっては、ある時、ふと、突然にしか経験されず、実感されない、自分の本質的なもの、出会いというのか、自分自らに出現するというのか、そういった人間存在を、サン・テグジュペリは把握したのである。

その本質的人間存在即ち < l'Homme > の上に、人類を、文明を、この廃虚になろうとしている中から救い出し、再構築しようとしたサン・テグジュペリは、一大思想家であり、真の意味での宗教家であったように、私には思われる。

今、サン・テグジュペリは、その人間救済の道、再構築の原理を把握して、心の底から湧きあがる、静かな喜びにひたされたのであった。彼は、次のように言っている。

Il est une commune mesure aux qualités que je souhaite aux hommes de ma civilisation. Il est une clef de voûte à la communauté particulière qu'ils doivent fonder. Il est un principe dont tout est sorti autrefois, racines, tronc, branches et fruits. Qui est-il? il était graine puissante dans le terreau des hommes. Il peut seul me faire vainqueur.<sup>(8)</sup>

そうして、また、次のようにも言っている。

Il me semble comprendre beaucoup de choses dans mon étrange nuit de village. Le silence est d'une qualité extraordinaire. Le moindre bruit remplit l'espace tout entier, comme une cloche. Rien ne m'est étranger. Ni cette planite de bétail, ni ce lointain appel, ni ce bruit d'une porte que l'on



referme. Tout se passe comme en moi-même. Il me faut me hâter de saisir le sens d'un sentiment qui peut s'évanouir.<sup>(9)</sup>

イエス・キリストが言われた、

Le temps est arrivé, et le royaume de Dieu est proche. Convertissez-vous et croyez à l'Évangile.<sup>(10)</sup>

という、言葉の内容そのものを、実感として、サン・テグジュペリは把握したと思われる。自他が合一して、しかも個を失うことなく、調和して把握される一体感、これを、サン・テグジュペリは感じ取ったのだ。

彼が言うように、ファシスト軍隊も、奴隷市場も、これまた同じく人間の協同体であるが、こういった、単なる協同体における一員には感じられない、或るもの、それを把握し、その生命を生きることが、サン・テグジュペリの人間の実存感なのであった。

その、或るもの、これが、サン・テグジュペリの言う <l'Homme> である。

サン・テグジュペリ自身が、

Ma civilisation repose sur le culte de l'Homme au travers des individus.<sup>(11)</sup>

および、

Ma civilisation est héritière des valeurs chrétiennes.<sup>(12)</sup>

と言うように、このことは、キリスト教および、キリスト教文明圏における、文明を指し示しているわけであり、その神と、神の子（イエス・キリスト）および人間（キリスト教における、あるべき姿として人間：理想像というか、おそらくは悔い改めが行われ召命に応じうる人間）を示しているのである。したがって、サン・テグジュペリの言う <l'Homme> は、彼の思索の中で、彼が創りあげた理想像ではなく、彼の心の中に深く根ざした、キリスト教、特にカトリックの教養によって、（或いは信仰と呼んでいいのかもしれないが）、サン・テグジュペリ

が感得した永遠なる者、即ち、神に召され得る、真実に存在している人間を指し示していると思われる。

そうして、ひるがえって今、サン・テグジュペリは、

Nous avons failli crever en France de l'intelligence sans substance.<sup>(13)</sup>

と彼自身言うように、まさに崩壊しようとしている人類と文明とを前に、彼は、何故このような事態に立ち致ったのか、何故本質的な本来の姿を見忘れて、人々が果てしなく流浪しつづけるのかを、見極めようとするのである。

Elle (Ma civilisation) a cherché, des siècles durant, à montrer l'Homme, comme elle est enseigné à distinguer une cathédrale au travers des pierres. Elle a prêché cet Homme qui dominait l'individu....

Car l'Homme de ma civilisation ne se définit pas à partir des hommes. Ce sont les hommes qui se définissent par lui. Il est en lui, comme en tout Être, quelque chose que n'expliquent pas les matériaux qui le composent. Une cathédrale est bien autre chose qu'une somme de pierres.... Ce ne sont pas les pierres qui la définissent, c'est elle qui enrichit les pierres de sa propre signification.<sup>(14)</sup>

ここには、サン・テグジュペリの思想の極めて重要な思惟の方法と根本理念が述べられている。

彼は、現実に目に触れる事実や、事象から、帰納したり、演繹したりして、自分の思想を打ち立てるのではなく、直観によって把握した理念によって、事実を解釈し、事象を捉えるわけである。

根本理念は l'Homme であり、この真実なる存在の実存感——それを、サン・テグジュペリは、いろいろな時に、例えばアラス上空の時の

ように、何度も感じたのである——に立って、彼は人間への愛を感じ、誤まれる方向へ逃亡しようとする文明を批判し、その真の姿の再構築を呼びかけるのである。そうして、サン・テグジュペリは、真の文明の、真の l'Homme の寛容さを、次のように言っている。

La cathédrale absorbe jusqu'aux gargouilles les plus grima-  
cantes, dans son cantique.<sup>(15)</sup>

しかし、人間は目に見え、肉体に感じられる事物や、意識に映る事象に惑わされて、目には見えず、意識のみでは感じられない「真の姿」、また事象の「真の意義」を見失ってしまったわけである。数千年の人知の蒙昧さのゆえに、真実を忘れてしまったのである。サン・テグジュペリは次のように言っている。

Mais, peu à peu, j'ai oublié ma vérité. J'ai cru que l'Homme résumait les hommes, comme la Pierre résume les pierres. J'ai confondu cathédrale et somme de pierres et, peu à peu, l'héritage s'est évanoui.<sup>(16)</sup>

それゆえに今、

Il faut restaurer l'Homme. C'est lui l'essence de ma culture. C'est lui la clef de ma Communauté. C'est lui le principe de ma victoire.<sup>(17)</sup>

と、サン・テグジュペリは必死に叫ぶのである。

サン・テグジュペリが、以上のような思惟の方法と、根本理念に立つ上で、勿論彼は、単なる唯物論や唯心論を飛び越えるわけである。意識を超越した精神、そうして、靈魂の不滅性と永遠性を確信というよりは、むしろ当然のこととして信じているのである。

これが、サン・テグジュペリの信仰であり、この靈魂の永遠不滅性の実感がなくしては、彼の思想も宗教もあり得ないわけである。

単なる観念の遊戯ではなく、真実なる存在の実在感であり、ゆるぎな

い信仰、即ち堅信であり、真の知と愛とを包含した生命の生命感とでもいうようなものである。

したがって、肉体や、この世界での生命について、サン・テグジュペリは、

Le corps, on s'en fout bien ! Ce n'est pas lui qui compte. . . .  
Je me demandais. . . . « Comment se présentent-ils, les derniers instants ? » . . . . On s'est identifié à cet animal domestique. (ma chair のこと) On dit de lui (ma chair) : c'est moi. Et voilà tout à coup que cette illusion s'éboule. On se moque bien du corps !<sup>(18)</sup>

このように、肉体を軽んじ、幻影にすぎないとして、否定した後に、真の自分を次のように肯定するのである。

Il (l'homme) ne se retranche pas, s'il meurt : il se confond.  
Il ne se perd pas : il se trouve. Ceci n'est point souhait de moraliste. C'est une vérité usuelle, une vérité de tous les jours, qu'une illusion de tous les jours couvre d'un masque impénétrable. . . . Mon corps, je me fous bien de toi ! Je suis expulsé hors de toi, je n'ai plus d'espoir, et rien ne me manque ! Je renie tout ce que j'étais jusqu'à cette seconde-ci. Ce n'est ni moi qui pensais, ni moi qui éprouvais. C'était mon corps.<sup>(19)</sup>

このように、イエスス・キリストが、十字架上で肉体を抹殺して、復活したように、サン・テグジュペリ自身も、完全に、思索上も実感上も霊と肉体とを分離し、弟を病いで失った時の肉体否定のエピソードを紹介して、更に次のように人は死なないと、断言して、l'Homme の出現に備えるのである。

On ne meurt pas. On s'imaginait craindre la mort : . . . . La

mort? Non. Il n'est plus de mort quand on la rencontre...  
 Quand le corps se défait, l'essentiel se montre. L'homme  
 n'est qu'un nœud de relations. Les relations comptent seules  
 pour l'homme.<sup>(20)</sup>

これは、まさに、仏教の高僧にも通じる悟りであり、敬虔な宗教者の等しく抱く境地であろう。

このように、肉体の否定の後で、出現する〈l'Homme〉を、サン・テグジュペリは、次のように、言うのである。ここには、また、サンテグジュペリの、最も根本的な理念が、示されているのである。

Durant des siècles ma civilisation a contemplé Dieu à travers les hommes. L'homme était créé à l'image de Dieu. On respectait Dieu en l'homme. Les hommes étaient frères en Dieu. Ce reflet de Dieu conférait une dignité inaliénable à chaque homme. Les relations de l'homme avec Dieu fondaient avec évidence les devoirs de chacun vis-à-vis de soi-même ou d'autrui.<sup>(21)</sup>

即ち、l'Homme は、神の姿に創られた、神と一体の、そうして神の資質を享けついだ個であり、肉体に宿りながら、かつ、これを超越して存在する、普遍にして、同時に、個別でもあり得る、永遠の実在者なわけである。このことから人間の尊厳は立ち現れ、全ての価値が、すべての意義が、存在そのものの *raison d'être* が存するわけである。

そうして、勿論、これは、神という全と、人間という個の問題の根本理念であり、人間と人間、即ち、個と個の関係を決定する理念なのである。この理念、原理から、人間にとって本質的、根源的な諸々の価値が生まれ、その価値の意義が、人間の行為を規定するのである。

Or ma civilisation a cherché à fonder les relations humaines sur le culte de l'Homme au delà de l'individu, afin que le

comportement de chacun vis-à-vis de soi-même ou d'autrui ne soit plus conformisme aveugle aux usages de la termitière, mais libre exercice de l'amour.... Les pentes invisibles de l'amour délivrent l'homme. Ma civilisation a cherché à faire de chaque homme l'Ambassadeur d'un même prince. Elle a considéré l'individu comme chemin ou message de plus grand que lui-même, elle a offert à la liberté de son ascension de directions aimentées.<sup>(22)</sup>

と、サン・テグジュペリは言い、人間の解放と自由とを意義あらしめ、それを彼は称揚するのである。

〈l'Homme〉の尊崇の上に、人間関係が築かれてこそ、各人の、自身および他人に対する行いが、解放された人間の自由な行為として、彼の言うように、「自由な愛情の流露たらしめられる。」のである。

このような「自由な愛」があってこそ、その愛の行為によって、人間は、その生命の尊厳を確信し、サン・テグジュペリの言う真の共同体を実現し得るのである。

サン・テグジュペリが、自らを巡礼に譬えて言ったように、彼が遍歴を重ねて到達した、思索の道の頂点が、「神」と、その普遍にして、個なる体现者としての〈l'Homme〉との世界なのである。

それは、生死を超越した、永遠の霊なる世界であり、そこに上昇しようとする時、現実の人間に〈l'Homme〉の反映が現れ、サン・テグジュペリの言う「交換」によって、個々の人間は意義あらしめられ、人間の尊厳が尊ばれるのである。そうして、現実の人間と人間の関係が根拠づけられ、また、人間と社会との関係も根拠づけられて、意義あらしめられるのである。先に、引用したように(注21)、サン・テグジュペリは言っている。

「数世紀の間、僕の層する文明は、人間の〈神〉に対する関係が、明

白に、各人の、自身及び他人に対する義務を根拠づけていたのであった。」と。

二千年にわたって、様々に衣替えし、着ぶくれしてきた、キリスト教および、キリスト教文明は、その外的な装いによって、本質を見失ったのである。

何故、見失ったかについて、サン・テグジュペリは、次のように考えるのである。〈Pilote de Guerre〉の27章から要約すると次のようになる。

個々の人間を通じて、静観した主なる「神」への尊崇を根拠とする人間関係の高貴性を救うために、「人間崇拜」の努力は悉く傾けられ、しかもユマニスムは、人間に対する〈l'Homme〉の優先権の現示と永続を使命とした。しかし、言葉が不便なためもあり、〈l'Homme〉を人間の資質によって定義したために、その本質を逸したというのである。即ち、〈l'Homme〉の観念を論理的及び倫理的な立場で捕えて、これを道念のうちに置き換えようと試みた所に、〈l'Homme〉の観念を見失ったというのである。

サン・テグジュペリは言っている。

Aucune explication verbale ne remplace jamais la contemplation. L'unité de l'Etre n'est pas transportable par les mots.<sup>(23)</sup>

もろもろの物、或いは事象の奥に存在する真実なる意義、或いは真実に存るべきものなる〈l'Etre〉、或いは〈les Etre〉の保証を持ち出すためには、先づ、それを自分のうちに根拠づけなければならず、そうして、人が自分のうちに根拠づける〈l'Etre〉は実行（行為）によって保証する以外にない。それなのに、「ユマニスム」は、その実行をなおざりにしたために、それを見失うに到ったというのである。

Un Etre n'est pas de l'empire du langage, mais de celui des

actes. Notre Humanisme a négligé les actes.

と。しかも、

L'acte essentiel ici a reçu un nom. C'est le sacrifice.... Il est essentiellement un acte.<sup>(24)</sup>

というように、「実行」の精神が「犠牲」であると、彼は説くのである。

そうして、「ユマニスム」が犠牲の主要な役割をなおざりにし、実行によらずに言葉によって、犠牲の観念を移植しようとしたために、〈l'Homme〉を全体の象徴と取り違える危険にさらされたというのである。

そうしてまた、個々の人間を通じて〈l'Homme〉の権利を強化する代りに、集団の権利を云々し始め、集団のモラルが優先し、この犠牲の真の意味、一つの実行を忘れ去ったと、サン・テグジュペリは言うのである。

Nous avons glissé — faute d'une méthode efficace — de l'Humanité, qui reposait sur l'Homme — vers cette termitière, qui repose sur la somme des individus. Qu' était devenue notre grande image de l'Homme né de Dieu<sup>(25)</sup> ?

以上のように、キリスト教およびキリスト教文明は、その本質を見失ったわけであるが、しかし、その外的な装いの奥に、サン・テグジュペリは、今、その本質を觀、それを捉え、「神」への信仰と、人間の生命の尊厳への目覚めと確信とを抱いて、静かな落ちついた喜びと、人間への信頼に満たされるのである。

そうして、サン・テグジュペリは、一部分は、先にも引用したのであるが、次のように断言するのである。

Ma civilisation est héritière des valeurs chrétiennes. Je réfléchirai sur la construction de la cathédrale, afin de mieux



comprendre son architecture.<sup>(26)</sup>

即ち、サン・テグジュペリの信仰はキリスト教であり、しかも、サン・テグジュペリの l'Homme 自身が把握したキリスト教の本質に対する信仰なのである。

そうして、その信仰の構造即ち、その内容は次のようなものである。

(1) Ma civilisation, héritant de Dieu, a fait les hommes égaux en l'Homme.<sup>(27)</sup>

即ち、神々に対して平等の故に、人間は平等である。人間は神を現わすものとしては、その権利において平等であり、神に仕える者としては、その義務において平等なのである。この神においてと言う、共通の尺度が欠如する時は、即ち、平等の原則が識別の原則に退化する時、そうして群衆籠絡の策謀が入りこんで、いわゆる、「みそもくそも一緒」の悪平等になると、サン・テグジュペリは言うのである。

...ayant oublié l'Homme, nous n'avons plus rien compris de ce dont nous parlions.... Comment définir l'Egalité, sur le plan des individus, entre le sage et la brute, l'imbécile et le génie? L'égalité sur le plan des matériaux exige, si nous prétendons définir et réaliser, qu'ils occupent tous une place identique, et jouent le même rôle. Ce qui est absurde. Le principe d'Egalité s'abâtardit, alors, en principe d'Identité.<sup>(28)</sup>

(2) Ma civilisation, héritant de Dieu, a fondé le respect de l'homme au travers des individus.... Les hommes étaient frères en Dieu.<sup>(29)</sup>

即ち、人間相互間の尊敬は、真人間に対して、人間を平等にしたからである。理由は、各人を通じて神を尊敬するからである。つまり、神に対する愛が、人間相互の間に、気品ある絆を打ち立てたのだと、サン・テグジュペリは言うのである。

- (3) Ma civilisation, héritant de Dieu, a fait les hommes frères en l'Homme.<sup>(30)</sup>

即ち、長い間に、人々は、自分達の友愛感を、相互間の寛怒でしかないものに退化させてしまった。しかし、人間相互の、本当の友愛は、人間が神において兄弟だからである。理由は、人は何ものかに対してのみ兄弟であり得、一つに束ねる結び目がなければ、人間は、単に並べられただけで、結束されたことにはならないと、サン・テグジュペリは言うのである。そうして、また、次のように言うのである。

Le partage n'assure pas la fraternité. Elle se noue dans le seul sacrifice. Elle se noue dans le don commun à plus vaste que soi.<sup>(31)</sup>

- (4) Ma civilisation, héritière de Dieu, a fait ainsi, de la charité, don à l'Homme au tavers de l'individu.<sup>(32)</sup>

即ち、慈善の意味は、個人を通じて「神」に仕える故に、意義があり、また価値があるのであって、慈善は個人を通じての〈l'Homme〉に対する施与であると言うのである。

そうして、また、次のように言うのである。

Exclusivement fondée sur les mouvements de pitié à l'égard des individus, elle (la Charité) nous est interdit tout châtement éducateur. Alors que la Charité véritable, étant exercice d'un culte rendu à l'Homme, au delà de l'individu, imposait de combattre l'individu pour y grandir l'Homme.<sup>(33)</sup>

- (5) Ma civilisation, héritière de Dieu, a prêché aussi le respect de soi, c'est-à-dire le respect de l'Homme à travers soi-même.<sup>(34)</sup>

即ち、「謙讓」についての、深い思索があるので、サン・テグジュペリの言葉を、そのまま引用する。

「それは (l'Humilité 謙讓)、彼に、他人を通じて神を尊敬するを余

儀なくすると同様に、自分に対して自分を尊敬するを、自らを「神」への途上にある「神」の使者たらしめるを余儀なくさせた。それは彼に、自分を大ならしめんがために自らを忘れるを余儀なくさせるのだった、理由は、個人がわれとわが重要さに感激するようだと、<sup>(35)</sup> 通い路は忽ち障壁と変ってしまうのだから。」と。

(6) Ma civilisation, héritière de Dieu, a fait chacun responsable de tous les hommes, et tous les hommes responsable de chacun.<sup>(36)</sup>

即ち、一個人は一集団の救済に身を犠牲にしなければいけないし、又一集団は一個人の救済に身を犠牲にしなければいけないというのである。キリスト教文明は、各人に全人間の責任を負わせ、全人間に各人の責任を負わせたというのである。その理由は犠牲を通じて、〈l'Homme〉を救出するというのである。このように人間相互に責務あるものとし、また人間に「希望」を美德の一つとして課したか、サン・テグジュペリは理解したと言うのである。それは、各人が、自分以上に力のある者の使者である以上、誰にも絶望する権利はない筈であると言うのである。

そうして又「犠牲」について、サン・テグジュペリは、次のように言っている。

Sacrifice ne signifie ni amputation, ni pénitence. Il est essentiellement un acte. Il est un don de soi-même à l'Etre dont on prétendra se réclamer.<sup>(37)</sup>

以上のように思索してきて、最後に、サン・テグジュペリは、次のように言うのである。

Je comprends clairement, à cette lumière, la signification de la liberté. Elle est liberté d'une croissance d'arbre dans le champ de force de sa graine. Elle est climat de l'ascension de l'Homme. Elle est semblable à un vent favorable. Par

la grâce du vent seul, les voiliers sont libres, en mer.<sup>(38)</sup>

又,

Je crois que la primauté de l'Homme fonde la seule Égalité et la seule Liberté qui aient une signification. Je crois en l'égalité des droits de l'Homme à travers chaque individu. Et je crois que la liberté est celle de l'ascention de l'Homme. Égalité n'est pas Identité. La Liberté n'est pas l'exaltation de l'individu contre l'Homme.<sup>(39)</sup>

そうして、サン・テグジュペリは、この〈l'Homme〉を忘却し、踏みつけ、抹殺しようとする者に対し、

Je combattrai quiconque prétendra asservir à un individu — comme à une masse d'individus — la liberté de l'Homme.<sup>(40)</sup>  
と言うのである。

また,

Je combattrai quiconque, prétendant que ma charité honore la médiocrité, reniera l'Homme et, ainsi, emprisonnera l'individu dans une médiocrité définitive.<sup>(41)</sup>

また,

Je combattrai pour l'Homme. Contre ses ennemis. Mais aussi contre moi-même.<sup>(42)</sup>

そうして、また,

Je combattrai donc quiconque prétendra imposer une coutume particulière aux autres coutumes, un peuple particulier aux autres peuples, une race particulière aux autres races, une pensée particulière aux autres pensées.<sup>(43)</sup>

と、決然として言うのである。

このようにして、サン・テグジュペリは、自分自身も、一身を犠牲に

捧げて、〈l'Homme〉と人類の未来を救済しようとしたのである。

注

(1) Saint-Exupéry, André-A. Devau, Desclée D Brouwer, Paris 1965

(2) 〈Pilote de Guerre〉 p. 369 ~ p. 370

Galliward 1959年 (Bibliothèque La Pléiade)

訳, 堀口大学 新潮文庫 174 p. ~ 175 p.

(3) *ibid.* p. 371 訳 *ibid* 176 p.

(今朝まで) 僕は、口やかましい管理人だった。あれが即ち、個人という奴だ。ところが「真人間」が姿を現わした。これが、あっさり僕の位置に腰をおろした。

(4) *ibid.* p. 371. 176 p.

彼(真人間)は混乱している群衆に目をやった、そこに彼が見たものはすでに一民族だった。彼の民族。真人間、それは、この民族と僕との共通の尺度だ。……「真人間」が僕の眼でものを見たわけだ——「真人間」、即ち同僚間の共通の尺度。

これも何かの兆だろうか？ 僕は極めて兆が信じたい気持だ……一切が、今夜は、暗黙の了解だ。あらゆる音が、託言のように、澄みきって、然も、ぼやけて僕を音ずれる……

またしても一度、僕はここに、奇蹟的な血縁の感じを受けるのだ。今夜僕の内部に住む「真人間」は、次ぎ次ぎに自分の仲間を枚挙しつづけてとどまらない。

「真人間」民族と種族の共通の尺度。

(5) *ibid* p. 372, 177 p. ~ 178 p.

僕の文明に於ける、僕と異なる分子は、僕を豊富にこそすれ、少しも僕を傷つけはしないのである。僕等の単一性は、僕等を超越して、「真人間」に基因している。

(6) *ibid.* p. 372, 178 p.

「真人間」中には、同様に、フランスのフランス人と、ノルウエのノルウエ人とが見出される。「真人間」は、彼等をその単一性のうちに結び付けると同時に、また矛盾なしに彼等各自の特殊な風俗をも称揚する。樹木もまた、その根とは似もやらぬ枝葉によって自らを表現するのである。だから、若し、かの国では雪のコントが作られ、オランダではチューリップが栽培され、スペインではフラメンコを即興的に踊るとしたら、僕等は一同が「真人間」中に豊富になったのだ。

(7) *ibid* p 372, 178 p.

今や自分は、長途の巡礼の終点にたどり着いたような気がする。僕は何ものをも発見したわけではないが、ただ、眠りから醒めた時のように、暫く見なかったものをまた見るに過ぎないのだ。

(8) *ibid* p. 371,

僕の文明に属する人々の質として、僕が期待する共通の尺度が一つある。彼等が築き上ぐべき特殊な協同体に必要な要石が一つある。かつては、根も、幹も、枝も、果実もそこから生れ出た原理が一つある。何れだろう？ それは人間の肥料土の中の強力な種子だった。これだけが、僕を勝利者に為し得るのだ。

(9) *ibid* p. 371, 176 p.

村での僕のこの不思議な一夜のおかげで、僕は色々な事が解って来たような気がする。四囲を包む沈黙はいとも深い。

僅かなもの音さえが、鐘の音かなにかのように、あらゆる空間に満ち渡る。あらゆるものが、僕の心にひびき入る。あの家畜のうめき声も、あの遠い人の呼び声も、戸口を閉すあの音も。一切が、僕の内部で行われているような気持だ。やがて消えるかも知れないこの気持の意味を急いで捉えておこう……

(10) マルコ伝 1章15節。

「時は満ちて、神の国は近づき、汝 悔改めて福音を信ぜよ」

(11) (Pilote de Guerre) p. 372,

訳. 堀口大学 新朝文庫 178 p.

僕の属する文明は、個々の人間を通ずる「真人間」の尊崇に立脚している。

(12) *ibid*. p. 374

僕の属する文明は、キリスト教的価値の相続者だ。

(13) *ibid*. p. 355, 150 p.

僕等フランス人は、本質のない知識の故に危く亡びかけた。

(14) *ibid*. p. 372, 178 p. ~ 179 p.

それは(僕の属する文明)多くの世紀を通じて恰も石材を通じて伽藍を見知ることを教えでもするかのように、「真人間」を示す方法を深し求めつづけて来た。それは、個人を超越したこの「真人間」を説き続けて来たのだ……

何故かというに、僕の属する文明の、「真人間」は、人間を基礎には定義しがたいからだ。人間たちが、彼「真人間」を基礎に定義されるのだ。彼「真人間」の内には、あらゆる「本然」に於けると同様、それを構成する素材によっては説明出来がたいものがある。一つの伽藍は、石材の総量とは完全に別個のものだ…それを定義するものは石材ではあり得ない、伽藍がその独自の意義によって石材を尊くするのだ。

(15) *ibid*. p. 372,

伽藍はその讚美歌のうちに、どんな調子っぱずれの声でも吸収してしまうのだ。

- (16) *ibid.* p. 372 ~ p. 373, 170 p.

ところが、だんだん、僕は自分の真実を忘れていた。僕は「石」が石材の総量を要約するように、「真人間」が人間を要約するものと信じていた。つまり僕は伽藍と石材の総量とを取りちがえていた、そのためにだんだん、祖先からの遺産が消え失せてしまうのだ。

- (17) *ibid.* p. 373, 179 p.

「真人間」を復興しなければいけないのだ。彼こそは僕の教養の結晶だ。彼こそは、僕の「協同体」の鍵だ。彼こそは僕の勝利の原理なのだ。

- (18) *ibid.* p. 345, 134 p.

肉体なんかはどうでもいいのだ！ 重要なのはそんなものではないのだ……  
(僕は) 自問した、「最後の瞬間というのは、どんな姿で現われるものなのだろうか？」……僕はこの家畜と同化してしまった。(肉体) ……自分は彼のことを、これが自分だと呼んだ。それなのに、忽如として、いまこの幻影が崩壊する。そして自分は、肉体を軽視するに至ったのだ。

- (19) *ibid.* p. 346, 136 p.

死んだとしても、彼(人間)は自ら廃したわけではなく、紛れたのだ。失われたのではなく、自分を見出したのだ。これは決してモラリストの夢想ではない。これはありふれた真実、日常の真実なのだが、ただ日常の錯覚が犯しがたいマスクとなってこれを被っているだけだ……

わが肉体よ、僕はそなたを軽んじるよ！ 僕はそなたの外へ放逐され、僕にはすでに希望もないが、また何の不足もない！ 僕は、今のこの瞬間以前に自分があった一切を否定する。それは、僕が思考したのでも感受したのでもなかった。それは僕の肉体がしたことだ。

- (20) *ibid.* p. 347, 138 p.

人は死なない。人は自ら死を怖れるかのように想像していた……。死は？ 怖れないのだ。死に直面する時に及んでは死はすでに存在しないのだ……。肉体が崩れる時、初めて本心が現われるのだ。人間は絆の塊りだ。人間には絆ばかりが重要なのだ。

- (21) *ibid.* p. 373, 180 p.

数世紀の間、僕の属する文明は、人間を通じて「神」を黙思して来た。人間は「神」の姿に創られていた。人々は人間のうちに「神」を尊んで来た。人間は「神」の同胞だった。「神」の反射が一人一人の人間に、譲渡し難い尊厳を与えていた。人間の「神」に対する関係が、明白に、各人の、自身及び他人に対する

義務を根拠づけていたのである。

(22) *ibid.* p. 373.

ところが、僕の属する文明は、人間関係を、個人を超越した「真人間」尊崇の上に築こうと努めて来た、かくすることによって、各自の、自身及び他人に対する行いを、白蛾の巣にふさわしいような盲目的画一主義から救い、自由な愛情の流露たらしめようとしたのである。愛情の不可視の坂が人間を解放するのだ。僕の属する文明は、各人を同じ一人の君主の「大使」たらしめようとして来た。それは個人を、彼以上の者の託言だと考えて来た、それは彼の上昇の自由に対し磁力ある種々な方向を提示して来た。

(23) *ibid.* p. 377, 186 p.

言語による如何なる説明も、決して黙思の代用にはならない。「本然」の純一性は、言葉で左右さるべくもない。

(24) *ibid.* p. 377,

或る一つの「本然」は、言葉の帝国ではなくて、実行の帝国だ。わが「ヒューニズム」は実行を等閑にした。

実行の精髓がここに初めてその名を与えられるに至った。それが犠牲だ……。それは（犠牲）専ら一つの実行だ。

(25) *ibid.* p. 378, 188 p.

有効な方法を欠いたがために、僕等は「真人間」に立脚した「人間社会」から、個々の人間の集積に立脚するあの白蟻の巣へと転落したのだった……「神」から生れた「真人間」のあの素晴らしいイメージは果してどうなり終ったのだろうか？

(26) *ibid.* p. 374,

僕の属する文明は、キリスト教的価値の相続者だ。僕はここでキリスト教というこの伽藍の建築を考察しようと思う。それによって、その構造をよりよく理解しようがためだ。

(27) *ibid.* p. 374

僕の文明は、「神」から受け継いで、人間を「真人間」に対して平等なものとした。

(28) *ibid.* p. 379,

ただ、「真人間」を忘却していたために、僕等には自分達の言っていることが丸で解からなくなっていた……個々の人間の面に立脚して、どうして「人間の平等」が定義出来よう？ 聖人と野人、阿呆と天才が平等だとは何うしても行くまい。人間の「平等」は物質の面で定義し実現するとなると、万人が同一の職を持ち、同一の役割を演ずることが必要となる。これは愚劣だ。これでは、人間「平



等」の原則が、「識別」原則に退化してしまう。

(29) *ibid.* p. 375, 182 p.

僕の文明は、「神」から受け継いで、個々の人間を通じて、人間に対する尊敬を樹立した……人間は「神」に対して同胞だった。

(30) *ibid.* p. 375, 182 p.

僕の文明は、「神」から受け継いで、人間を「真人間」に対して兄弟たらしめた。

(31) *ibid.* p. 380, 190 p.

分配は友愛感を保証してくれない。友愛感は犠牲によってのみ結ばれる。友愛感は自己より広大なものに対する共同の施与によって結ばれる。

(32) *ibid.* p. 375, 183 p.

僕の文明は、「神」から受け継いで、このようにして、慈善をば、個人を通じての「真人間」に対する施物となした。

(33) *ibid.* p. 380, 190 p.

専ら個々の人間に対する憐憫の情に立脚するに到ったそれは（慈善）、育成のためにする一切の懲罰を禁じたわけだ。もともと、真の「慈善」なるものは、人間を乗り越えて「真人間」に捧げられる尊崇の実践であるところから「真人間」を成長させるために個人と戦うことを強うるものなのだ。

(34) *ibid.* p. 375, 184 p.

僕の文明は、「神」より受け継いで、自尊の精神、即ち、自己を通じての「真人間」に対する尊崇を説いた。

(35) *ibid.* p. 375, 183 p.

(36) *ibid.* p. 376, 184 p.

僕の文明は、「神」から受け継いで、各人に全人間の責任を負わせ、全人間に各人の責任を負わせた。

(37) *ibid.* p. 377, 186 p.

犠牲は、断絶をも、苦楽をも意味するのではない。それは専ら一つの実行だ。それは、人が頼ろうとするその「本然」に対して自己を施与することだ。

(38) *ibid.* p. 376, 184 p.

僕には、この文明の光に照らして、初めて自由の意義が明らかに領かれる。それは、種子の力の及ぶ範囲に於ける樹木の生長の自由だ。それは「真人間」の上昇の風土だ。それは順風の如きものだ。風のおかげがあればこそ、帆船は海上で自由なのだ。

(39) *ibid.* p. 383, 195 p.

僕は信ずる、「真人間」の優先権が意義のある唯一の「平等」と唯一の「自由」

とを根拠づけると。僕は各個人を通じて「真人間」の権利の平等を信ずる。また僕は、「自由」とは「真人間」の上昇の自由に他ならないと信ずる。「平等」は「同一」ではない。「自由」は、「真人間」に対する個人の興奮ではない。

(40) *ibid.* 383 p. 195 p.

何人にまれ、個人に対して、また個人の集団に対して「真人間」の自由を抑制しようとする者と僕は戦うであろう。

(41) *ibid.* p. 383 ~ p. 384,

何人にまれ、僕の慈善が凡庸を榮譽づけるものなりと称して、「真人間」を否定し、これによって、個人を決定的な凡庸さの中に閉じこめようとする者と、僕は戦うであろう。

(42) *ibid.* p. 384, 195 p.

僕は、「真人間」のために戦うであろう。彼の敵に対して。然もまた、自分自身に対して。

(43) *ibid.* p. 383, 195 p.

つまり僕は、何人にあれ、他の風習に代る或る特殊な風習を強うる者、他の国民に代る或る特殊な国民を強うる者、他の民族に代る或る特殊な民族を強うる者、他の思想に代る或る思想を強うる者と戦うであろう。

## 文 献

「サン・テグジュペリの生涯」山崎庸一郎 新潮社 昭和46年。

「星の王子とわたし」内藤濯 文芸春秋社 昭和43年。

「城砦の成立過程をめぐって」杉山毅 広島大学文学部紀要32巻2号(1973)。

Luc Estang saint-Exupéry par lui-même "Ecrivains de Toujours à aux Editions du seuil 1970.

pierre Chevrier Saint-Exupery notes et documents de Michel Onesnel Paris, Gallimard 1971.

R.-M. ALBERES Saint-Exupéry Paris, Editions ALBin Michel 1961.

Andre-A. Devaux Saint-Exupéry Paris, Pescleede Brouwer 1965.

カーティス・ケイト「アントワーヌ・ドゥ・サンテグジュペリ」山崎庸一郎 洪沢彰訳 番町書房 1974年。

ルネ・ドラランジュ「サン・テグジュペリの生涯」山口三夫訳年 1963。みずづ書房

日本語訳文は次によって引用させていただきました。

「戦う操従」土堀口大学 新潮社